

NEW JAPAN
*P*HILHARMONIC
SUMIDA, TOKYO

新日本フィルハーモニー交響楽団
2023/2024シーズン



2024

1

January

2

February

2023/2024 シーズン
新日本フィルハーモニー交響楽団 1, 2月演奏会

Contents

トリフォニーホール・シリーズ/サントリーホール・シリーズ #653 石川亮子	1
マーラー: 交響曲第4番 歌詞対訳	8
すみだクラシックへの扉 #20 小室敬幸	11
楽員ストーリーズ ㊸ 桂田光理(ヴィオラ)	17
NJP from Inside	18
2024/2025シーズン 定期演奏会プログラム	20
NJP 3月公演 柴田克彦の鑑賞ポイント	25
お客様からの声	27
室内楽シリーズ	29
「パトローネージュ・システム」のご案内	34

■特別支援企業

オリックス
in 鹿島
CCC
大和証券
東京東信用金庫
NOMURA
フジサンケイグループ
三井住友銀行

■特別支援団体

公益財団法人 オリックス宮内財団

特別支援企業/団体は、新日本フィルの運営を支援しています。

〈コンサートの感想をお寄せください〉

演奏会終了後1週間以内にご回答いただいた方の中から、抽選で10名様に新日本フィルオリジナルグッズをプレゼント!

QRコードを読み込み、WEBにてお答えください。プレゼントの当選者にはメールにてご連絡させていただきます。culture@njp.or.jpからのメールが受信できるようご設定をお願い致します。

<https://forms.gle/nzYkJLAuZG1tfYY36>



いただいたお声は次号以降の定期演奏会プログラムでご紹介させていただく可能性がございます。ご了承ください。

〈ご来場のお客様へのお願い〉



Triphony Hall Series
Suntory Hall Series
2023-2024 Season
#653

1.19 [金]
サントリーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団
サントリーホール・シリーズ 第653回定期演奏会
2024年1月19日(金) 19時00分
サントリーホール

1.20 [土]
トリフォニーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団
トリフォニーホール・シリーズ 第653回定期演奏会
2024年1月20日(土) 14時00分
すみだトリフォニーホール

●武満 徹 (1930-96)

系図 一若い人たちのための音楽詩 *

約25分

Toru Takemitsu: Family Tree -Musical Verses for Young People *

1. むかしむかし
2. おじいちゃん
3. おばあちゃん
4. おとうさん
5. おかあさん
6. とおく

—— 休憩20分 ——

●マーラー (1860-1911)

交響曲第4番 卜長調 **

約55分

Gustav Mahler: Symphony No. 4 in G major **

- I. ゆっくりと 急がないで
Bedächtig, Nicht eilen
- II. ゆったりとしたテンポで 急がずに
In gemächlicher Bewegung, Ohne Hast
- III. 安らぎに満ちて
Ruhevoll: Poco adagio
- IV. きわめてなごやかに
Sehr behaglich

[指揮] 佐渡 裕

Yutaka Sado, Conductor

[朗読] 白鳥玉季 *

Tamaki Shiratori, Recitation *

[アコーディオン] 御喜美江 *

Mie Miki, Accordion *

[ソプラノ] 石橋栄実 **

Emi Ishibashi, Soprano **

[コンサートマスター] 西江辰郎

Tatsuo Nishie, Concertmaster

[アシスタント・コンサートマスター] 立上 舞

Mai Tategami, Assistant Concertmaster

■主催: 公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団

■共催: すみだトリフォニーホール [1/20公演]

■特別協賛: オリックス株式会社/公益財団法人オリックス宮内財団

■助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(創造団体支援))

独立行政法人日本芸術文化振興会

一般社団法人授業目的公衆送信補償金等管理協会(SARTRAS)

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

オリックス株式会社
公益財団法人 オリックス宮内財団



共通目的事業・助成事業



Profile



©Takashi Iijima

佐渡 裕 [指揮] Yutaka Sado, Conductor

京都市立芸術大学卒業。故レナード・バーンスタイン、小澤征爾に師事。1989年ブザンソン国際指揮者コンクール優勝。パリ管弦楽団、ロンドン交響楽団、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団など欧州の一流オーケストラに多数客演。現在オーストリアのトーンクンストラ管弦楽団音楽監督、兵庫県立芸術文化センター芸術監督、シエナ・ウインド・オーケストラの首席指揮者を務める。CDリリースは多数あり、最新盤としてトーンクンストラ管を指揮した18枚目のCD『マーラー：交響曲第3番』を2023年5月にリリース。著書に『僕はいかにして指揮者になったのか』（新潮文庫）、『棒を振る人生～指揮者は時間を彫刻する～』（PHP文庫／新書）など。2022年4月より「すみだ音楽大使」、23年4月には新日本フィルハーモニー交響楽団第5代音楽監督に就任。

オフィシャルファンサイト：

<http://yutaka-sado.meetsfan.jp>



©浦田大作

白鳥玉季 [朗読] Tamaki Shiratori, Recitation

2010年1月20日生まれ。東京都出身。

2016年NHK連続テレビ小説「とと姉ちゃん」で女優デビュー。同年公開の映画『永い言い訳』にてスクリーンデビューを果たす。その後、映画『アウト&アウト』（18）、映画『mellow』（20）、『ステップ』（20）、ドラマ「凧のお暇」（19/TBS）、「テセウスの船」（20/TBS）などに出演。

2022年公開の映画『極主夫道 ザ・シネマ』と『流浪の月』では、一方で振り切ったコメディ、またその一方では重厚感のある作品という両極に位置する世界観で魅せる姿が話題を呼ぶ。昨年は、大河ドラマ「どうする家康」で茶々の少女期を演じ、同期間放送のドラマ「いちばんすきな花」（23/CX）では、自身と同じ中学2年生の等身大で繊細な役を演じ切った。他にNetflixドラマ「御手洗家、炎上する」、映画『正欲』（23/岸善幸監督）に出演。

【公式サイト】 topcoat.co.jp/tamaki_shiratori

【Instagram】 @shiratori_tamaki



©Marco Borggreve

御喜美江 [アコーディオン] Mie Miki, Accordion

東京生まれ。16歳で渡独後、クラシック・アコーディオンの世界を切り拓いた“アコーディオンの女王”。CD『平均律クラヴィーア曲集』はドイツで最も権威ある「OPUS KLASSIK」を受賞。パロックから現代まで幅広いジャンルを自在に演奏し、ピアノ、ヴァイオリン、打楽器、ハーブなど、様々な楽器との共演指名も多い。

日本では1977年に岩城宏之指揮・札幌交響楽団でデビュー。87年にサントリーホール、88年にカザルスホールのオープニングシリーズに出演。自主企画リサイタル「御喜美江アコーディオン・ワークス」を1988年より開催し、高橋悠治、吉松隆、細川俊夫など、現代を代表する作曲家達が御喜の為に新曲を多数作曲している。

小澤征爾や佐渡裕、シャルル・デュトワ、マリオ・ヴェンツァーゴら名匠の指揮で、NHK交響楽団、サイトウ・キネン・オーケストラ、スイス・ロマン管弦楽団、ベルリン・ドイツ交響楽団、トーンクンストラ管弦楽団、東京フィルハーモニー交響楽団などの名門楽団と多数共演。現在、 Folkwang 芸術大学 (ドイツ) 副学長、新疆音楽大学 (中国) 名誉教授。



石橋栄実 [ソプラノ] Emi Ishibashi, Soprano

大阪音楽大学専攻科修了。大阪舞台芸術奨励賞、音楽クリティック・クラブ奨励賞、咲くやこの花賞、坂井時忠音楽賞、他受賞。

1998年、ドイツ・ケムニッツ市立劇場『ヘンゼルとグレーテル』にグレーテル役として招かれる。以来、新国立劇場『沈黙』オハル、『ラ・ボエーム』ミミ、ムゼッタ、『フィデリオ』マルツェリーネ、『ドン・ジョヴァンニ』ツェルリーナ、兵庫県立芸術文化センター『夕鶴』つう、びわ湖ホール『カルメン』ミカエラほか、数多くオペラに出演し続けている。また、パッハ「マタイ受難曲」、メンデルスゾーン「エリア」、モーツァルト「戴冠ミサ」「ミサ曲ハ短調」「レクイエム」、ベートーヴェン「エグモント」、ブラームス「ドイツ・レクイエム」、R.シュトラウス「4つの最後の歌」、ヴェルディ「レクイエム」、ドヴォルジャーク「スターバト・マーテル」、オルフ「カルミナ・ブラーナ」、ベルク「七つの初期の歌」などで全国のオーケストラと多数共演。NHKニューイヤーオペラコンサート出演。

大阪音楽大学教授。

わかれのあさ～、ふたりは～、さめたこうちゃ～、のみほし～♪ 隣の部屋から聞こえてくる義理の父の歌声に驚愕した。夫の歌声に酷似していたのである。夫は母親似で知られており、何なら話す声も全く父親に似ていない。しかし歌声は父親そのものなのであった。

声とは不思議なものである。その人のなかから出てきて、おはようのひとことで、その日の様子も機嫌もわかる。ロッシーニ・テノール、ヴェルディ・バリトンの言葉があったり、作曲家には好みの声があることも多く、ソプラノの声を愛したR.シュトラウスが「ばらの騎士」のオペラの終盤に、極上にロマンティックな女声のみによる三重唱を書いたことは広く知られる。オーケストラとともに語り歌う。人間にとって唯一無二である声を、武満とマーラーはオーケストラ音楽のなかでどう聴かせるのか、じっくり味わってみることにしよう。

■ 武満 徹：系図―若い人たちのための音楽詩

「ノヴェンバー・ステップス」と「系図」。武満徹(1930~96)はニューヨーク・フィルハーモニックの創立125周年と150周年を記念する、2つの委嘱作品を書いた。日本的な「間」やノイズに満ちた日本の伝統楽器を、西洋の前衛的な語法によるオーケストラに「対置」させること―。1967年に琵琶、尺八とオーケストラのために書かれ、武満を「世界のタケミツ」として知らしめた「ノヴェンバー・ステップス」。一方、晩年にあたる1992年に書かれた、語りとオーケストラのための「系図 Family Tree」は、武満が「この世界の音楽大家族の核にあたるもの」と考えた調性を積極的に用いた、「おだやかで、肌理こまかな、単純な音楽」である。

加えて、「若い人たちのための音楽詩」の副題が示すように、「系図」は若い人たちに向けて書かれ、オーケストラとともに詩が歌われるのではなく朗読されることを特徴とする。詩は、1988年に刊行された谷川俊太郎の詩集「はだか」から。「はだか」に収められた23の詩は、すべてひらがなで書かれており、ぼく(おとうと)とわたしの視点から、おとうさん、おかあさん、おじいちゃん、おばあちゃん、ごろー(犬)、くろすけ(猫)の一つの家族の物語が語られる。「ぼくはうそといっしょに生きていく」。「わたしひとりでもくせいまでいってくるわ」。思春期にあると思われる、ぼくとわたしを通して谷川が紡いだ23の詩から、武満は6つの詩を選んだ。その際、谷川の許可のもと若干の詩の並びかえが行われ、「むかしむかし」と「おばあちゃん」における「ぼく」が「わたし」に変更されて、「十代半ばの少女」を

ナレーターとする家族の物語へと再構成されている。

曲の構成と音楽の特徴

曲は、オーケストラ(アコーディオンを含む)の序奏から始まる。そこには下行する音型、どこか懐かしい感じのするメロディー、そしてゆるやかに上行し消えていく音型(これぞタケミツ・トーン)といった、曲で使われる主要な素材が含まれている。朗読は「むかしむかし」に始まり、「おじいちゃん」「おばあちゃん」「おとうさん」「おかあさん」とゆっくりとしたペースで進み、最後の「とおく」は、「でもわたしはきつとうみよりももっととおくへいける」という言葉で結ばれる。後奏では、シャンソンを思わせるアコーディオンの心に染み入るソロに続いて、オーケストラからも次々と甘美な歌があふれていき、透明なハ長調の響きの海へと溶け合わされていく。

[編成]フルート3(ピッコロ、アルトフルート持替)、オーボエ2(イングリッシュホルン持替)、クラリネット4(バスクラリネット持替)、ファゴット3(コントラファゴット持替)、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、吊しシンバル、アンティークシンバル、タムタム、スティールドラム、グロックンシュピール、ヴィブラフォン、チャイム、ハープ、アコーディオン、チェレスタ、朗読、弦楽5部。

■ マーラー：交響曲第4番ト長調

※歌詞対訳は8~9頁をご覧ください

番号付けされた9曲と「大地の歌」、そして未完の第10番。グスタフ・マーラー(1860~1911)における交響曲の創作は、様々な意味で歌曲との間を行き来しながら進められた。ドイツ民謡詩集「子供の魔法の角笛」による同名歌曲集と、密接に結び付いて生み出された第2番から第4番の交響曲。交響曲第4番は「角笛交響曲」の三部作の最後を飾ると同時に、マーラー自身によって第1番からの「四部作」を完結させるものと位置付けられている。

とは言え第4番は、しばしば親しみやすく聴きやすい交響曲と説明される。事実、ソプラノ独唱が加わることを除けば合唱もなく、演奏時間も長大ではない。オーケストラにはトロンボーンとチューバが含まれず、大音量よりも明るさが志向されており、4つの楽章の構成から見ても、きわめて古典的な交響曲への回帰をみせている。

作曲の経緯 ▶ 作曲の始まりは1892年までさかのぼる。マーラーは1892年に民謡詩集「子供の魔法の角笛」から「天国の暮らし」を含む5つの歌曲を作曲し、翌年「5つのフモレスケ」として初演した。さらに1895年、交響曲第3番の構想において「天国の暮らし」を終楽章に置こうとするも断念。新たにこれを締めくりとする、交響曲第4番を作曲することにしたのだった。その間、マーラーは1897年10月にウィーン宮廷歌劇場の芸術監督に就任。第4番の本格的な作曲は1899年夏から始まり、翌年夏にも続けられた。

NYフィル150周年の委嘱作 ▶

少女によって語られる家族の物語 ▶

「角笛」三部作の最後の作品 ▶

古典への回帰 ▶

作曲の経緯 ▶

運命の年に初演 ▶

第4番は標題付きではないものの、長年にわたって最良の友人としてマーラーを支えた、ナターリエ・パウアー=レヒナーに語った言葉がある。「いわゆる空の青を想像してごらん。それが [この曲] 全体の基調となるものだ。それは時々暗くなったり、おそろしくきらびやかになったりする。つまり空そのものは変わることなく、永遠の青のなかで暗くなったり光り輝いたりする。そして我々だけが不意に不気味に思うのだ。気持ちよく晴れた日に光が降り注ぐ森のなかで、よく突然に驚かされるように」。初演は1901年11月、ミュンヘンで行われた。その直前にマーラーは運命の女性アルマと出会い、アルマへの愛情と葛藤のなかで、第5番以降の交響曲は手がけられていくことになる。

曲の構成と音楽の特徴 ▶

第1楽章は鈴の音とフルートの印象的な序奏から始まる。ソナタ形式による主部も、引き続きメルヘンの世界のなかにある。穏やかで軽やかな第1主題と、のどかで歌謡的な第2主題。展開部には突然、フルート4本のユニゾンによる新しいメロディー（アドルノによって「夢のオカリナ」と呼ばれた）や、交響曲第5番の冒頭のファンファーレ等が現れて聴く人を驚かせる。

第2楽章はスケルツォ楽章に相当する。耳を引くのは、長2度高く調弦するよう指示された独奏ヴァイオリンが「フィドルのように」奏でる音色であろう。そのグロテスクな表情には、草稿に「友人ハイン」と記された、中世以来のヴァイオリンを弾きながら「死の舞踏」を先導する骸骨のイメージが重ねられている。中間にはレントラー風の2つのトリオがはさまれ、スケルツォ主部との際立った対比をなす。

第3楽章の二重変奏による緩徐楽章は、ベートーヴェンの「第九」がモデルと推察される。長調による安らぎに満ちた主題と、短調による嘆きの歌の主題が交互に変奏されるが、終わり近くに、突如として金管楽器のファンファーレが鳴り響く（第4楽章の予告と第1楽章の回想）。しかしそれも束の間、また元の静けさに戻っていく。

第4楽章ではソプラノ独唱が、「わたしたちが楽しんでいるのは天国の歓び」と歌い出す。詩が語るのは、長年ドイツ民衆が考えてきた「天国の暮らし」。かのゲーテはそれを「愚かなキリスト教徒のパラダイス」と評した。途中、何度かフラッシュバックのように響く鈴の音が両端の楽章を結び合わせながら、最後は天上の音楽をたたえて消えるように終わる。

【編成】ソプラノ独唱、フルート4（ピッコロ2持替）、オーボエ3（イングリッシュホルン持替）、クラリネット3（Es管クラリネット、バスクラリネット持替）、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット3、ティンパニ、大太鼓、シンバル、吊りシンバル、トライアングル、鈴、タムタム、グロッケンシュピール、ハープ、弦楽5部。

「あした」は、ナニイロ？

鹿島のしごと。

それは「あした」をつくること。

人と自然と向き合って、

よりよい毎日をつないでいくこと。

暮らしを描く、ものづくり。

無限の創造力で、彩り豊かな未来へ。

100年をつくる会社

in 鹿島



SHARE LOUNGE

発想が生まれ、シェアする場所

シェアラウンジは、ラウンジの居心地と本による提案、オフィスの機能性を兼ね備え、訪れた人に「新しい発想を提供する場所」です。

新たな発想は心を躍らせ、生活を明るくし、世界をほんの少し良い場所にしてくれるもの。働く人だけでなく、お子さまや学生、主婦の方など、すべての人たちが日々の暮らしの中で、発想を必要としています。

ここに集まる多様な人々が風景をつくり、そこにいるだけで刺激がもらえたり、本からインスピレーションを得ることもできる。ある時は居心地の良いカフェやバーとして、またある時は体験を促すイベントスペースとして。

新たな発想を生む、たくさんの仕掛けが詰まった空間です。

SHARE LOUNGE by Culture Convenience Club

[SHARE LOUNGE]

代官山 蔦屋書店／六本木／丸の内／渋谷スクランブルスクエアほか、全国に順次拡大中。最新の店舗一覧はアプリをご覧ください。



SHARE LOUNGE
公式アプリ

App
Store



Google
Play



SUMIDA
TOBIRA of classic
2023-2024 Season
#20

2.16 [金] 17 [土]

すみだクラシックへの扉

新日本フィルハーモニー交響楽団 定期演奏会 すみだクラシックへの扉 第20回
2024年2月16日(金)14時00分 すみだトリフォニーホール
2月17日(土)14時00分 すみだトリフォニーホール

●久石 譲 (1950-)

I Want to Talk to You -for string quartet, percussion and strings- * 約10分
Joe Hisaishi: I Want to Talk to You - for string quartet, percussion and strings - *

●モーツァルト (1756-91)

交響曲第41番 八長調 K.551「ジュピター」 約30分
Wolfgang Amadeus Mozart: Symphony No. 41 in C major, K. 551 "Jupiter"

- I. Allegro vivace
- II. Andante cantabile
- III. Menuetto: Allegretto
- IV. Molto allegro

—— 休憩20分 ——

●ストラヴィンスキー (1882-1971)

バレエ音楽『春の祭典』—2部によるロシアの異教徒の情景 約35分
Igor Stravinsky: Le sacre du printemps -Tableaux de la Russie païenne en deux parties

- I. 大地への崇敬 L'Adoration de la Terre
序奏／春の予言ー若い娘たちの踊り／誘拐の遊戯／春のロンド／競い合う部族の遊戯
賢者の行進／賢者／大地の踊り
- II. 生贄 Le Sacrifice
序奏／若い娘たちの神秘的な輪／選ばれし者への賛美／祖先たちへの呼びかけ
祖先たちの儀式／神聖な踊り(選ばれし者)

[指揮] 久石 譲

Joe Hisaishi, Conductor

[ヴァイオリン] 崔 文洙、ビルマン聡平 *

[ヴィオラ] 中 恵菜 * [チェロ] 向井 航 *

[コンサートマスター] 崔(チェ)文洙、伝田正秀

Munsu Choi and Masahide Denda, Concertmaster

■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団

■共催：すみだトリフォニーホール

■助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(創造団体支援))
独立行政法人日本芸術文化振興会
一般社団法人授業目的公衆送信補償金等管理協会(SARTRAS)

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないよう確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。



すみだ

共通目的事業・助成事業

SARTRAS





©Nick Rutter

久石 譲 [指揮]

Joe Hisaishi, Conductor

国立音楽大学在学中よりミニマル・ミュージックに興味を持ち、現代音楽の作曲家として出発。1981年「MKWAJU」を発表、翌年に1stアルバム「INFORMATION」を発表し、ソロアーティストとして活動を開始。84年の映画『風の谷のナウシカ』以降、宮崎駿監督作品の音楽を担当するほか、『HANA-BI』『おくりびと』『悪人』『かぐや姫の物語』『家族はつらいよ』など、話題作の映画音楽を多数手掛け、日本アカデミー賞最優秀音楽賞、2009年紫綬褒章、2023年旭日小綬章受章など数々の賞に輝く。演奏活動においては、04年7月、「新日本フィル・ワールド・ドリーム・オーケストラ(W.D.O.)」の音楽監督に就任。また2017年から「Joe Hisaishi Symphonic Concert: Music from the Studio Ghibli Films of Hayao Miyazaki」の世界ツアーをスタートし、パリ、メルボルン、ロサンゼルス、ニューヨーク、プラハ等で開催し、大成功を収める。近年は「交響曲第2番」や「Metaphysica (交響曲第3番)」などの作品発表にも意欲的。海外ではウィーン響、ヘルシンキ・フィル、ロンドン響、メルボルン響、アメリカ響、バンクーバー響、シンガポール響、香港フィルなどの指揮を執る。14年より、世界の最先端の“現代の音楽”を紹介するコンサート・シリーズ「MUSIC FUTURE」を始動。19年7月、「フューチャー・オーケストラ・クラシックス(FOC)」をスタートさせ、同年「久石 譲 ベートーヴェン：交響曲全集」をリリースし、第57回レコード・アカデミー賞特別部門特別賞を受賞。国立音楽大学招聘教授。20年9月から新日本フィルハーモニー交響楽団Music Partnerに就任。21年4月日本センチュリー交響楽団首席客演指揮者に就任。25年4月から同交響楽団音楽監督に就任予定。

あらゆる音楽においてリズムは、メロディと同じぐらい根源的な要素である。ダンスがあれば多くの場合、リズムを生み出す打楽器が欠かせないし、なんらかの言語を発した時点で、そこには韻律としてのメロディやリズムの芽吹きがあるからだ。

ミニマル・ミュージックにも影響を与えたインド音楽などのように、世界の伝統音楽には非常に複雑なリズムが存在している。だがクラシック音楽(西洋音楽)においてリズムの可能性が追求されるようになるのはメロディやハーモニーに比べると遅く、20世紀になってからなのだ。作曲家としてのみならず指揮者としてもリズムの秘められた可能性に着目し、古典的な名作からも新たなリズムを引き出す久石譲の手腕が、本公演の聴きどころとなるだろう。

■ 久石 譲：

I Want to Talk to You - for string quartet, percussion and strings -

2023年3月30日、音楽レーベルの名門ドイツ・グラモフォンは久石譲(1950~)との契約を発表。同年6月30日に英国のロイヤル・フィルを指揮した作品が世界にむけてリリースされたことで、改めて久石の世界的な人気に注目が集まっている。現在73歳だが、映画音楽のみならず長年追求してきたミニマル・ミュージックを通して、これから更に世界的な名声を高めてゆくに違いない。

合唱曲から誕生 ▶ そんな久石が、意外にも初めて書き下ろした合唱曲から派生して生まれたのが本作である。きっかけになったのは山形県合唱連盟から委嘱された創立70周年を記念する合唱曲であった。直訳すれば「あなたと話したい」という意味になるこのタイトルについて、久石は「街中を歩いていても、店の中でも人々は携帯電話しか見ていない。人と人とのコミュニケーションが希薄になっていくこの現状に警鐘を鳴らすつもりでこのテーマを選んだ」と語っている。

作曲、初演の経緯 ▶ 2020年3月にまずは合唱曲(全2楽章)として完成。だがパンデミックの拡大により初演の見通しがたたくなくなってしまう(久石自身も語っているように、こうなると携帯電話のお陰でコミュニケーションが出来るという、まるで逆の状況になってしまったのが興味深い)。そこで作曲中に考えていた、第1楽章を弦楽四重奏と弦楽オーケストラ(最終的には打楽器も加わった)に置き直すというアイデアを実行。こうして誕生した弦楽版は2021年3月に、オリジナルの合唱版は2022年4月に初演されている。

[楽器編成] 弦楽四重奏、ヴィブラフォン、マリンバ、大太鼓、弦楽5部。

■ モーツァルト：交響曲第41番 ハ長調 K.551「ジュピター」

技法を極めた最後のシンフォニー

1788年8月10日、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756~91)が32歳で完成させた生涯最後の交響曲である。3年半後にこの世を去るなど思いもしなかったはずだが、史上最高の天才のひとりモーツァルトが持てる技術をすべて費やし、ソナタ形式を一捻り加えて使用したり、対位法の可能性を追求したりした傑作であるため、集大成に位置づけられることが多い。ローマ神話の最高神ユピテル(ギリシア神話のゼウスに相当)の英語読み「ジュピター」と名付けたのは作曲家本人ではないが、本作がどれほど崇められてきたかが伝わる愛称だ。

4楽章の構成と音楽の特徴

第1楽章は、提示部-展開部-再現部で構成されるソナタ形式である。第1主題は、軍楽隊のような力強いリズムが先導。特徴的なのは、いかにも第2主題風に始まる旋律が実は第1主題の変奏であることが少しあとに発覚。その後、改めて展開部でも活躍する本物の第2主題が登場する。

第2楽章は緩徐楽章だが、再びソナタ形式。清廉な第1主題のあとに登場する、短調で悩ましいメロディは繋ぎとなる移行部。波打つ第2ヴァイオリンの伴奏の上で歌われるのが第2主題である。展開部は悩ましい旋律で始まり、すぐに第1主題が再現されたかのように思えるが、これは偽物。展開部は続いており、本物の再現部は第2主題から始まる。

第3楽章はメヌエットで、三部形式。冒頭に登場する半音階下行を含むメロディが、至るところで繰り返される。中間部(トリオ)では、最終楽章の冒頭にあらわれる主題が予告される。

第4楽章は、終結部に5声のフーガが待ち受けるソナタ形式。提示部には合計6つの主題(a~f)が登場。第1主題(a, b, c, d)、第2主題(e, f, d, c, b)、小結尾(c)といったように、主題はセクションをまたいで使用されている。展開部はaとc、2つの主題だけが変奏されて再現部に戻る。

重要なのは終結部で、主題aが折り重なる短い間奏を挟んでフーガに突入。まずは2声(e, a)から始まり、3声(e, a, d)、4声(e, a, d, f)、5声(e, a, d, f, c)と重なる主題が増えてゆき、金管とティンパニが加わるトゥッティ(総奏)でクライマックスに到達する。唯一、フーガに絡まらなかった主題bが回帰すると終わりも間近。主題cがもう一度あらわれて、この傑作を締めくくる。

[楽器編成]フルート、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部。

第1主題

第2主題

■ ストラヴィンスキー：

バレエ音楽「春の祭典」—2部によるロシアの異教徒の情景

ディアギレフのバレエ団による話題作

1913年5月29日、パリのシャンゼリゼ劇場でロシアバレエ団が初演した「春の祭典」は、バレエと音楽の歴史にスキャンダルと革命を起こした。舞台作品であるため、作曲家イーゴリ・ストラヴィンスキー(1882~1971)の独力で生み出されたわけではなく、世界観とあらすじは舞台美術と衣装を担った画家ニコライ・リョーリフ(1874~1947)の協力によって創られた。

影響を与えた美術家の存在

ただしリョーリフは最初期こそロシアの古い歴史の情景を描いていたが、現在でいえば(日本のオカルト的な意味での)“スピリチュアル”ともいえる神智学や東洋哲学に傾倒していったことで、ヨーロッパとアジアの文化が交わり、精神的にも純粹で自然と調和した——という聞こえはいいが、それゆえに神へ生贄を捧げる—原野として、想像上の古代ロシアを描くようになってゆく。「春の祭典」はこうしたリョーリフの意識が変わってゆくタイミングで、ストラヴィンスキーと交流して誕生した作品なのだという。

初演のニジンスキーによる振付ではバレエに明確なストーリーラインはないが、スラヴ神話において春と豊穡(言い換えれば愛欲、死と再生)をつかさどる男神ヤリーロを崇める人びとの生活を描く。

構成(2部)と音楽の特徴

第1部：大地への崇敬 「序奏」の終わりで幕が上がり、弦楽が力強いリズムを刻む「春の予言—若い娘たちの踊り」から本編開始だ。打楽器が激しく打ち鳴らされる「誘拐の遊戯」は、いわば女性をめとる予行練習。穏やかに始まる「春のロンド」は徐々に熱狂。テンポの速い「競い合う部族の遊戯」のさなか「賢者の行進」も通りかかる。盲目の「賢者」がひれ伏して大地を祝福すると、その場にいる全員で「大地の踊り」となり、地球とひとつになろうと踊り狂う。

第2部：生贄 日が暮れて、「序奏」では文明がない時代の不気味な夜が描かれる。ヴァイオラが分奏してメロディを弾き始める「若い娘たちの神秘的な輪」において、男神ヤリーロに捧げる生贄を選ぶ。決まった女性を中心に置いて「選ばれし者への賛美」、「祖先たちへの呼びかけ」、「祖先たちの儀式」と準備段階を経て、いよいよ「神聖な踊り(選ばれし者)」で生贄になった女性は命尽きるまで踊り続ける。

[楽器編成]フルート3(ピッコロ持替)、ピッコロ、アルトフルート、オーボエ4(イングリッシュホルン持替)、イングリッシュホルン、クラリネット3(バスクラリネット持替)、Es管クラリネット、バスクラリネット、ファゴット4(コントラファゴット持替)、コントラファゴット、ホルン8(ワーグナーチューバ2持替)、トランペット4、ピッコロトランペット、バストランペット、トロンボーン3、チューバ2、ティンパニ、大太鼓、シンバル、タンバリン、トライアングル、アンティークシンバル、タムタム、ギロ、弦楽5部。